

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520010

研究課題名（和文）

認知言語学的イメージ・スキーマ理論の現象学的基礎付けの試み

研究課題名（英文）

The Phenomenological Foundation of Cognitive-Linguistic 'Image-Scheme' Theory

研究代表者

宮原 勇 (MIYAHARA ISAMU)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：90182039

研究成果の概要（和文）：

目立たない対象や直接的にアクセスするには唐突すぎるような場合に、既に際だっている対象にアクセスしてそれを手掛かりとして前者の対象にアクセスする認知構造である「参照点」構造に関して、また、複数の対象が現出し、織りなしている「事態」を表現するときに見られる landmark-trajector 構造について、さらには一連の時間的プロセスとしてイメージ・スキーマが描かれる「時間的プロセス」構造について、現象学の立場から分析した。

研究成果の概要（英文）：

In this project the three main phenomena have been investigated from the phenomenological standpoint: (1) the reference-point structure, which we can find when we try to access some un-salient target or some target that it is not appropriate to access directly, (2) the landmark-trajector structure, through which some states of affairs in which some single objects participate have been constructed, and (3) the temporal process structure, which we can elucidate as a series of transitive processes.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2009年度 | 1,500,000 | 450,000   | 1,950,000 |
| 2010年度 | 1,400,000 | 420,000   | 1,820,000 |
| 2011年度 | 700,000   | 210,000   | 910,000   |
| 総計     | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：現象学、認知言語学

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者宮原は平成14年度から16年度にかけて科学研究費補助金を交付され「言語カテゴリーの生成に関する現象学的、認知言語学的研究」を推進してきた。この研究は「認知言語学」と現象学的言語論の統合を目指す試みであり、言語カテゴリー生成の一般理論の構築が目指された。その研究では、<カテゴリー生成の過程にとって具体的な身体的経験が根底において機能し、特に抽象的概念の形成やその理解にはメタファが深く関与

している>ことが明らかとなった。この成果を承けて平成18年度から20年度にかけて交付された科学研究費補助金「概念形成へのメタファの関与に関する現象学的、認知言語学的研究—特に哲学の基礎概念を事例として—」では、具体的に基本的な「哲学概念」を事例として、概念形成に際してメタファがどのように関与するかを解明した。各哲学概念の意味内容を最新の認知言語学のアナロジーやメタファに関する理論によって解明し、それぞれの基本的な哲学概念の根底に込め

られている「根本的経験」の解明をするとともに、最終的にはアナロジーやメタファに関わる人間の根源的認知能力を現象学的観点から解明した。この間、日本の認知言語学研究の第一人者である京都大学山梨正明教授の主催する研究会に参加し、研究成果を発表する機会を得て、現時点での認知言語学自体の最新の問題がどこにあるのかが明らかとなった。そもそも研究代表者宮原がもっぱら取り組んできている認知言語学の理論は、ラネカーの理論であるが、2008年に刊行された彼の *Cognitive Grammar* (Oxford UP) では、これまでの彼の理論の全面的再検討がなされているという事情や山梨教授との討論(科研費での講演会や京都大学での毎月の研究会における討論)から、「イメージ・スキーマ」というシンボリックな表示法を使い、認識主体であり表現主体の「概念化」を文構造に即して解明するという認知言語学の方法論的問題をいわば「哲学的」に検討することや「概念化」という基本的概念自体を再検討する必要があることが明らかとなった。

## 2. 研究の目的

平成 14 年から二回にわたる科学研究費補助金で研究してきた認知言語学と現象学の統合の試みも、今回のプロジェクトでは、ラネカーの「認知文法」、ないしは認知言語学の哲学的基盤を問う段階に入った。このような研究は世界的に見ても全く独創的な研究であり、他の研究者によっては未だなされてはいない。それは、フッサール現象学の言語理論を徹底的に理解した上で、ラネカーの認知言語学という専門性の高い言語理論を検討するという学際的な作業を前提とするからである。言語学研究者の中には、認知言語学に対して、その方法論や基礎概念に対する批判がみられる。今回の企画「認知言語学的イメージ・スキーマ理論の現象学的基礎付けの試み」では、ラネカーの「認知文法」、ないしは認知言語学の哲学的基盤を問うという作業を通じて、認知言語学への批判に対する反論が実質的になされた。

われわれは日常経験の場においてさまざまな概念、ないしはカテゴリーを使用している。そのような概念のシステム、あるいはネットワークを「オントロジー」ということにすると、哲学は古来そのような「オントロジー」はどのような構造を持ち、そしてそもそもどのようにしてそのような仕組みが「発生」してきたかの解明に多大な労力を注入してきた。他方、認知言語学ではそれを、「言語的カテゴリー化」にまつわる「プロトタイプ/スキーマ」理論によって解明してきた。そして、それが具体的にどう使用されるかに関しては、「イメージ・スキーマ」理論によ

る解釈を行ってきた。今回のこの企画では、認知言語学が種・類を表現する普通名詞や物と物との関係を表現する前置詞句、さらには Copula を介する述語構文などのイメージ・スキーマを描くのに対応して、そのような「概念化」がどのようにして成立したかを、現象学的志向性理論によって解明せんとするものである。これは、後期フッサールの発生的現象学の理論の応用になっている。

## 3. 研究の方法

まず、現象学者 Edmund Husserl の言語理論の検討。その成立と晩年の発生的現象学での言語理論を、特に 1908 年の『意味論講義』と没後出版の『経験と判断』の綿密なる検討と翻訳を通じて明らかにする。1908 年の『意味論講義』の翻訳・研究では、前期から中期にかけてのフッサールの言語理論の成立の過程を辿ると共に、「静態的」現象学の時期の言語理論の特徴と問題点を摘出する。そして、『経験と判断』の翻訳・研究では、後期フッサールで展開された「発生的」現象学での言語理論を明らかにし、その分析方法を摘出する。

そして、認知言語学者ラネカーの「認知文法」理論の検討。まず、1987年 *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*、1991年の *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application* の研究。そして、1990 *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*、1999 *Grammar and Conceptualization*、2008 *Cognitive Grammar, A Basic Introduction* の研究。

これらの著作において展開されているイメージ・スキーマを使用した文法構造分析を検討し、その方法を身につけると共に、その基本概念の問題点を摘出した。特に言語の表層構造と「概念化」過程との対応がどのようになされているか、そして、その「概念化」というプロセスはどのようなものとして理解されているかを解明した。

以上の作業を遂行しながら、認知言語学で解明されているいくつかの基本概念や基本構造を、現象学的志向性分析でもって再検討する。まず、平成 21 年度での計画は、以下の基本概念と基本構造に関して検討を試みた。(1)「参照点」(reference point)構造: 所有などの言語現象の解明に使用する概念で、もともとそれ自体では目立たない対象とかそれ自体としては直接的にアクセスするには唐突すぎるような場合に、既に際だっている対象にアクセスしてそれを手掛かりとして前者の対象にアクセスする認知構造。メト

ニミーといった修辞構造の成立にも関与している。(2)「ランドマーク-トラジェクター」(landmark-trajector)構造:複数の対象が現出している状況の中で、それらの対象が織りなす一つの「事態」を表現するときに見られる構造が landmark-trajector 構造である。例えば二つの対象の上下関係を表現するとき、その内の一方を目印として landmark にし、他方を trajector にして表現する。(3)「時間的プロセス」(temporal process)構造:例えば、enter といった移動を表現する動詞などの分析の場合、下記の図のような一連のプロセスとしてイメージ・スキーマを描写する必要がある。

以上のような認知言語学でのイメージ・スキーマを現象学的方法である志向性分析、つまり認識対象を構成する意識の志向的働きとして解明した。

平成 22 年度以降は、次のような言語現象に関して志向性分析がなされた。

- ・ 述語文として表現されるような「事態把握」の成立過程
- ・ 移動や変化に関する表現にみられる「起点・経路・着点スキーマ」
- ・ メタファに見られる「ソース・ドメイン」(メタファにおける喩える側の概念領域)と「ターゲット・ドメイン」(喩えようされている目標領域)の相関的構造
- ・ 言語表現がその発話行為上の「現在」やその「現場」に投錨されることによって具体的な事実の叙述となる現象である「グラウディング」(grounding)の構造が解明された。

#### 4. 研究成果

認知言語学、とくに認知文法学の第一人者ラネカーの認知言語学の基礎概念とイメージ・スキーマという視覚的表示方法に関して、現象学の認識論と言語論、とくにフッサールの志向性理論と後期の発生的現象学に見られる生成的視点から検討し、その認知言語学の哲学的基礎付けを行った。その成果は2009年度の日本認知言語学会のシンポジウムでの研究代表者宮原の講演「認知言語学の哲学的基礎」とそれを敷衍した論文「認知言語学の哲学的基盤—現象学の立場から—」(『日本認知言語学会論文集』、第10巻、p.631-645、2010年)、さらには前述の山梨教授の主催する研究会「京都言語学コロキウム」での発表

「‘Subjectification’ と

‘Intersubjectification’ —認知言語学と現象学の交差するところ(I) —」(2011年)となって、公表された。ここに於いて問題と

なって現れてきたのは、言語表現、特に知覚野に於ける個体指示において、指示表現の基軸が「主観化」されるという現象の問題である。主観化されても、表現としては主観自体を指す表現は逆に姿を消す。つまり、その言語表現自体を見れば、客観的な描写であるかのようなものが、実態としては主観的描写なのである。申請者の見解では、対象指示に際しては、全く無反省的にただ目の前の現象を素朴に記述する「自然的描写」と、それを自覚化しつつも敢えて表現しない「主観主義的描写」は区別せねばならない。しかも、自己自身を対象化し、さらには言語化することによって眼前の現象野の内に観察可能な指示物として位置づける「客観主義的描写」が成立しうる。さらには、相手との〈視点の交換〉という操作によって、「相手側から」指示表現を行うということもありうる。つまり、問題は三つあることになる。(1)全く素朴で自然的な現象記述から「主観的」描写が出てくるプロセス、(2)発話主体が対象化され他の対象と同列に扱われるという「客観的」眼前の現象野の内に観察可能な指示物として位置づける「客観主義的描写」が成立しうる。さらには、相手との〈視点の交換〉という操作によって、「相手側から」指示表現を行うということもありうる。つまり、問題は三つあることになる。(1)全く素朴で自然的な現象記述から「主観的」描写が出てくるプロセス、(2)発話主体が対象化され他の対象と同列に扱われるという「客観的」描写が生ずるプロセス、(3)「主観的」描写を前提にしながらも、〈視点の交換〉により相手側からの現象記述をするプロセス、それぞれのプロセスの解明が必要となってきた。特に(3)の問題は「あたかも相手の視点にいるかのように」という他者理解の問題なのであり、deixis という指示詞の使用の問題に留まらず、社交的(phatic)な表現や敬語(honorifics)の問題と関わり、認知言語学では広く「相互主観性」の問題として取り上げられるようになってきている。このように、申請者のこれまでの研究の流れと認知言語学での流れが一致し、本研究の遂行の必要性が生じたと言える。ラネカーらを中心とする認知言語学の展開も具体的な発話状況の分析が進むと対人的関係そのものをどのように分析するかという「相互主観性」に係わる問題が重要になってきており、国内外の研究でも相互主観性[ないしは間主観性]をテーマとする研究が増えてきているのが現状である。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

①宮原勇、主観の解体と自己の探求、中部哲学会年報、査読有、2012年8月刊行予定、pp.1-21.

②Isamu Miyahara, *The Mental Lexicon and the Architecture of Encyclopedia*, in: *Hidden Grammars of Transculturality: Shifting Powers of Encyclopedic Writing*, Madeleine Herren-Oesch & Barbara Mittler (Ed.), 査読有, 2012. pp.1-21.

③宮浦国江、STORY スキーマを活性化させる英語教育、『最新言語理論を英語教育に活用する』藤田耕司他編。(開拓社) 査読有、2012年3月、pp.414-423.

④宮浦国江、類似性と相違性—XがYのように見える時、『ことばとコミュニケーションのフォーラム』安武知子他編。(開拓社)、査読有、2011年、pp.184-196.

⑤宮原勇、認知言語学の哲学的基盤—現象学の立場から—、日本認知言語学会論文集、査読有、第10巻、2010年、pp.631-645.

〔学会発表〕（計5件）

①宮浦国江、認知言語学を英語学習/教育、日本認知言語学会、2011年9月16日、奈良教育大学(奈良市)

②宮原勇、‘Subjectification’ と ‘Inter-subjectification’ —認知言語学と現象学の交差するところ(I)—、京都言語学コロキウム、招待講演、2011年6月25日、京都大学(京都市)

③宮原勇、主観の解体と自己の探求、中部哲学会、招待講演、2010年10月2日、名古屋文理大学(稲沢市)

④Isamu Miyahara, *Mental lexicon and encyclopedic knowledge*, Symposium: Between East and West: Transcultural Flows of Encyclopedic Knowledge, 2010年4月22日、ハイデルベルク大学(ハイデルベルク、ドイツ連邦共和国)

⑤宮原勇、認知言語学の哲学的基礎、日本認知言語学会、招待講演、2009年9月27日、京都大学(京都市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮原 勇 (MIYAHARA ISAMU)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90182039

(2) 研究分担者

宮浦 国江 (MIYAURA KUNIE)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：50275111

(3) 連携研究者

なし